

2025年7月の総評に代えて 高橋修宏

ろっこつかたち
に
鳥をまもるとき
けやきの喉はよくしなる 弓
さいう（石川県）

ひとつの鮮烈な形象化に向かって、一つひとつの言葉が選ばれ、修辞的に連なる。一字空白を用いた最後の「弓」も効果的。見事な一作。

いたるところにいるね見えてる
粉になんでも
小野寺 里穂（神奈川県）

はたして、「粉になんでも」見えているものは何か。彼岸の死者たちか、動物霊か、あるいは何か不穏なものなのか。さまざまな想像を呼び起こす。

留め具がみつからない
氷枕みたいに
くちをぼんやりあけている
加藤 万結子（愛知県）

「氷枕みたい」が、具体的な映像を呼び起こすトリガーとなる。放心と呼ぶには、余りにも痴呆的なイメージが、ありありと現前する。

廃版の海図に遠く手の記憶
大嶋 碧月（石川県）

その「廃版の海図」は、それまでも多くの者に用いられてきたのだろう。けっして出会うことのない者たちの「手の記憶」が、いま目の前にある。

エレベーターホールを抜けて
上昇の感覚がまだ胃にあたたかい

汐見りら（東京都）

「まだ胃にあたたかい」という感受がユニーク。だれもが感じるエレベーターの身体に残る痕跡が、独自な視点で捉え返されている。

通過電車で眠る誰かのために
初夏、美しい駒になりたい

常田 瑛子（山口県）

もしや、見知らぬ他者への優しさなのだろうか。一瞬の「誰か」の夢の中で、きっと「美しい駒」は、つかのまの癒しとなるはずだ。

夏 脳から植物園がはみ出す

千葉羅点（愛媛県）

きっと、それは熱帯植物園であるはずだ。「夏」、そして「脳」という措辞が、省略されたイメージを補い、語りだす。

海も空も母も深い青になる

金光 舞（埼玉県）

「母も」の一語を呼び出すことで、ポエジーが生まれた。おそらく「深い青」は、いのちが生まれる色なのだろう。

君が代と
三十八度五分の平熱

山中 三五夜（佐賀県）

「三十八度五分」とは、一般的な平熱ではない。明らかに病的な高熱だろう。「君が代」と取り合わされことで、鋭い異和と批評が生まれた。

遠縁の遠さよ烏瓜の花

絵巻（東京都）

「烏瓜の花」は、一夜限りの白く儂い花。「遠」の一字をくり返すことで、まさに遠く儂くなってしまった「縁」にリアリティを与える。

のむヨーグルト

方舟くらいのワンルーム

波津 ゆみ（神奈川県）

二行目、「方舟くらいのワンルーム」には驚いた。「方舟」という神話性を帯びた存在が、まさに日常の中でのリアリティを持った。「のむヨーグルト」の生活感とも響き合う。

ますかつとを

しっていますか

ひせいきこよう

の頃の

Yohei（東京都）

三行目、「ひせいきこよう」によって社会批判が生まれる。その人の雇用形態や収入によって、さまざまな食品へのまなざしも異なってしまっている。そんな時代に、われわれも生きていることを、やんわりと突きつける作品。